

はじめに

本書を読んでいる方はどのような気持ちでこの本を手にとったのだろうか。ダメというタイトルが気になったから？ 大学の先生に教科書指定されたから仕方なく？ あるいはウェブサイトの隅っこに出てきたからかもしれない。いずれにせよ、まず読者が気になるのは、「ダメ」という部分であろう。結論を先に述べれば、本書は、ダメ（駄目）であり、かつタメ（為）でもある本を目指して編まれたものである。そのため書名も、見方によっては「ダメになる人類学」と見えることもあるし、「タメになる人類学」と見えることもある。本書は、ダメそうな（文化）人類学者が、ダメそうな人たちと共有したダメな事例を集めた、珠玉の事例集である。これらは一見すると、ダメなようにも思えるが、時には積極的にダメになることは返ってダメ（駄目）ではなくタメ（為）になるのではないかと、と編者らは考えている。

ダメの語源は囲碁にあると言われている。ダメとはつまり「駄目」である。囲碁は白と黒の石を置いて、どちらがより多くの陣地をとるか、というゲームなわけだが、駄目とは、打っても打たなくても別に領地が増えるわけではない目を指す。だから駄目の場所に石を置いたとしても、勝負に影響を及ぼすわけではない。それが転じて、「役に立たない」とあるとか、「使い物にならない」といった意味で使われる言葉となったわけだが、われわれはこのダメな感じを積極的に評価したいと思っている。

勝敗という目指すべき方向性がある囲碁であるならばともかく、私たちの人生・生活には明確な方向性や指標があるわけではない。ただ、「こうした方がよいよ」と言われることは多く、実際、助言に従った方がよいことの方が多いのだが、人生・生活は常に最善手を打ち続けられるわけではない。明確な勝敗があるわけではない日常生活において最善手が何かなどわかるはずもなく、私たちは時として、駄目を指して落ち込んだりもする。「ああ、無駄だった」「失敗してしまった」「正規ルートから外れてしまった」と。しかし、ダメなことはかなり状況依存的で、場合によってはタメになることかもしれない。

私たちの日常生活はさまざまな制約に溢れている。たとえば、小さいころから、あれをすればダメだ、これをしてはダメだと言われて育つ。たとえば人を殺してはダメだという大きな問題から、授業中に寝てはダメだという日常生活の細部に至るまで、ダメに包まれているのである。そして場合によってはそのダメなことは、ある社会における慣習として〇〇文化として継承されたり、法律や条例で明文化されたりすることもある。

しかし興味深いことに、かつてダメだったけれど今はよくなった、または、かつてはよかったけれど、今はダメになったということもある。たとえば、性の多様性（LGBTQ）は、かつてこそほとんど社会的に認知されたり承認されたりすることはなかったが、現在では少しずつ理解されるようになってきている。逆に喫煙文化は、かつてこそどこにでも（それこそ駅、エレベータ前、飛行機の中にまで）灰皿があったが、今では建物や地域全体で全面禁煙化され、メディアにおいては喫煙シーンの放送自粛などといった状況にまで追い込まれている。

つまり囲碁の駄目とは違い、日常生活におけるダメかどうかは、非常に状況依存적であり、その線引きはその時代や社会状況に大きく依存している。なので、世間や社会から「ダメだね」とか「ダメ人間」と言われてもあまり気にしないようにしよう。その点、文化人類学者は基本的に世間から見て（よい意味で）「ダメ」な領域の人が多いような気がする。

文化人類学者の「仕事場」はフィールドとも呼ばれるが、フィールドにいる文化人類学者は、対象社会の規範と価値を常に頭のどこかで気にしながら聞き取りや分析を行っている。どうして彼／彼女はあんなにも周りから称賛されるのだろうか、とか、さっきの行為で急にみんなの顔色が曇ったぞ、とかである。これらを注視することは、なにをダメとし、なにをダメとしないのかを強く意識しているということの現れでもある。また文化人類学者は、その社会でダメとされる人物や振る舞いを否定しないばかりか、それらを積極的に取りあげてその社会が大切にしているものを明らかにしようとする。ダメとされる人物の語りや、ダメとされる行為の背景が、意外とその社会の本質を突いていると感じた経験をもつ文化人類学者は多いのではないだろうか。

つまり文化人類学者は、二重の意味で「ダメの専門家」とも言えるのである。一つは、人類の文化のもつ多様性に寛容で、かつ、そこにこそ注目する学問的背

景をもった研究者として。もう一つは、文化の多様性に共感した結果、自身の振る舞いもおおらかで寛容になってしまった人間として。つまり「ダメの専門家」が書く、ダメな事例集が本書『ダメになる人類学』である。

本書は、以下の2通りの人たを主たる読者と想定して書かれている。一つは、大学の1年生で初めて文化人類学という学問に触れる学生である。たとえ文化人類学を専攻するわけではない経済学部、工学部、理学部、法学部……などの学生であっても伝わるように書かれている（つもりである）。「やっぱり日本人でよかった。日本に生まれてよかった」ではなく、「うーん……この人たちはダメだなあ。でもまあ楽しそうではあるし、それもありかな」と思ってくれば本望である。大学生活はいろいろな悩みもあるかと思うが、ダメだと感じたり、もうダメだと思ったとしても本書を繰って、著者らを笑い生きる糧にしてくれればと願っている。

もう一つの対象は、かつて大学で文化人類学を学んだ人たを想定している。「グローバル化と言われ続けて何十年もたったけど、まだ『未開』ってあるの？」そもそも「いまの文化人類学者って何やっているの？」ということに対して、（まだ／新たに）こんなことやってますよ、と答えているつもりである。ヌアは難民キャンプで牛（あるいは野生のキュウリ）がなくなったら今度はレモンを使うし、超監視国家となった中国においては現代版「上有政策下有対策（上に政策あれば下に対策あり）」が継続しているし、パプアニューギニアでは婚資が豚から現金となったのだけれど、再び現金から豚に戻ったりしている。そういう意味で、文化人類学者らは今だに忙しく過ごしている。

本書は「教科書」として使うことも想定してつくられているが、いわゆる一般的な教科書とは様相を異にしている。つまり、学説史や文化人類学における諸理論をほとんど記載していないのである（その代わりに各章末にはBook Guide、各節末にはキーワードリストが用意されている）。それには以下のような理由がある。まず、学説史や諸理論を紹介する良書はすでに数多出版されているため。また文化人類学やその周辺領域を専攻しない学生（経済学部、工学部、理学部、法学部……）にとっては、学説史や諸理論は「入口」として敷居が高いためである。そして何より編者らは、文化人類学が一番面白い部分は、想像力を掻き立てる事例（特に執筆自身が登場する部分）にあると考えているためである。

本書を「教科書」として使用する場合は、反転授業として使用してもらえればと考えている。つまり事前に本書の該当箇所を読んできてもらい、講義にてその学説史的背景、理論的な説明を加えるということである。本書は、これまで文化人類学の教科書で何度も登場してきたような基本的な概念（アニミズム、機能主義、通過儀礼、構造主義……等々）に対してほとんど言及していない。学生はまずは事例を読んできて、授業の中でそれを体系的に解説してもらい、理解するというのが本書を「教科書」として使用した際の使い方となる。

前置きが長くなってしまったが、最後にもう一つだけ。本書は、学術的な諸問題、日常における疑問の終着点・到達点として想定されて編まれたわけではない。むしろその逆で、本書から学問的な諸問題、日常的な疑問が開かれていくというようになれば、という思いで編まれている。そのため各章の末尾には、Further Studiesとして、参考文献ではなく、この場所に行こう、このサイトを見てみよう、この観点からこの作品を観てみよう！といった項目を設けている。本書はゴールではなく、スタートである。ぜひ本書をもって「街」にでてほしい。

本書が『ダメになる人類学』となるか『タメになる人類学』となるかは、あなた次第だ。

目次

はじめに ii

第1部

生業・生態

Chapter

- 1 移動への構え——家を堅牢につくっちゃダメですか？ 2
家はしっかりつくる？ 2/定住/移動に関する研究 2/ミエンの焼畑と家の建て方 3/移動するか定住するか 4
- 2 “丁寧な暮らし”と過去になりたての未来——食べ物手づくりじゃなきゃダメでしたっけ？ 6
様々なレトロフューチャー 6/レトロフューチャーとしてみる日本農業機械史と手仕事 6/歩行型トラクター・自脱型コンバインの描いた未来予想図 7/丁寧な暮らし・丁寧な歴史意識——“未来”と“過去”双方向の予想図 8
- 3 資源管理と集団魚毒漁——コモンズには社会の秩序がないとダメ 10
コモンズと社会の秩序 10/小規模社会の資源管理 10/テワードの集団魚毒漁 11/グローバル・コモンズ概念の難しさ 13
- 4 人が決めてもダメでした——人間と家畜の関係性 14
ノマド（遊牧民）に惹かれて 14/家畜利用とその原理 14/あなたはなぜ移動したの？ 15/自然と人のかかわりあい 16
- 5 もめごとの処理——話し合わなきゃダメですか？ 18
もめごとを処理する 18/狩猟採集民にみるもめごとの処理 18/「身を引く」ということ 19/解決することと解消すること 20

第2部

食と習慣

Chapter

- 1 混ぜないビビンバがダメな理由——韓国料理が大事にするもの 24
韓国料理との距離感 24/なぜ混ぜて食べるのか 24/美味しさの背景 26/混ぜないビビンバとは 27
- 2 ニューギニア島の食生活と歴史——サツマイモなしではダメなのです 28
ニューギニア島の食生活 28/人類の食生活の多様性 28/イモとニューギニア高地人 29/日本でのサツマイモと社会の変革 31
- 3 時間の感覚と生活習慣——0時に日付が変わらないとダメですか？ 32
時刻に合わせた生活 32/人類と時間の観念 32/旧暦と新暦——並行する2つの時間 33/時計の「時間」=絶対的な基準？——縛られなくてもよいのかも？ 35

4 働かないとダメですか？

——業務内容：飲茶（アットホームな「職場」です） 36
「勉強しなさい！」がない社会 36/「もう一つの資本主義経済」が教えてくれること 36/日に数回お茶を飲むアットホームな「職場」です 37/人付き合いこそが「仕事」です 39

5 異なる医療文化の出会い——脈診は片腕だけじゃダメでした 40

医療と歴史・文化 40/東アジアへの近代医療の導入——中国大陆を中心に 40/史料からみる異なる医療文化の出会い 41/医療・身体に関する人類学と歴史学 43

第3部

交換と経済

Chapter

- 1 婚資を分割払いしてはダメですか？——一括払いは水くさい 46
贈与とお返し 46/贈与交換と婚資 46/ミエンの婚資 47/負い目は縁？ 48
- 2 あなたのコメはどこから？ わたしは実家から！——自由にコメを送っちゃダメだった国ニッポンの現在 50
日々食べるコメの入手方法から覗く「直近の過去」 50/食糧の調達をめぐる社会と近代 50/コメの調達をめぐる人々の歴史意識 51/身辺卑近の問いから見える直近の過去と社会 52
- 3 資源開発と結婚ブーム——現金はダメだからまたブタで 54
鉱物エネルギー資源開発がもたらすものとは 54/資源開発による生活と社会への影響 54/資源開発のもたらした結婚ブーム 55/資源開発をどのように「文化人類学する」のか 56
- 4 勝手に使っちゃダメですか？——モノの所有と使用 58
自分のモノとは？ 58/「モノを所有する」こと 58/そこは他人の家だけど？ 59/変わっていく所有の概念 61
- 5 シェアリングが支える豊かさ——そんなに持たなきゃダメですか？ 62
持つこと=豊かさ？ 62/持たないこと=豊かさ？ 62/今日のムラブリ 63/分かち合うということ 64

第4部

コトバと世界観

Chapter

- 1 洗濯物の下をくぐっちゃダメなわけ——バリ島における上下の秩序と世界観 68
洗濯物の下をくぐってはいけない？ 68/パンツで知る上下の秩序 68/秩序の感覚と世界観 69/身体感覚としての「浄性」 70

2 時間と人間関係——集合時間を決めてもダメでした	72
時間とは	72/時間学の問い 72/テワードにおける約束・時間・人間関係 73/時間と人間関係の捉え方 75
3 コーラがオレンジ色ではダメですか？——言葉とカテゴリー	76
とりあえずビール	76/名前とモノ——どの文化でも常に同じものを指し示すのか 76/フィールドの宴会から 77/「観察」のおもしろさ 78
4 用語に惑わされてはダメ！——琉球語の人称と数の話	80
「僕らはみんな生きている」	80/除外と包括 80/包括は1人称複数か？ 81/「僕らはみんな生きている」から見えてきたこと 83
5 識字文化の諸相——本は読まないでダメですか？	84
読むことを期待されていない文字？	84/声の文化と文字の文化 84/東南アジアの宗教リテラシーの事例 85/読んでわからない文字言語、聞いてわからない音声言語 86

第5部

家族・親族

Chapter

1 ミエンの親子観——血がつながってなければダメですか？	90
親子は血がつながっている？	90/親子関係の研究 90/ミエンの養子 91/人間関係の多面性 93
2 核家族化——大家族ではダメですか？	94
日本の家族	94/核家族化？ 94/ミエンの家族 94/家族の形 97
3 移動を生きる——家族って一緒に暮らさなきゃダメですか	98
今、離れて暮らす家族たち	98/文化人類学における家族をめぐる議論 99/分散居住——トランスナショナルな家族の営み 99/家族って一緒に暮らさなきゃダメですか 101
4 漢族の名前と世代——勝手に名前を変えたらダメですか？	102
名前は勝手に変えることができない？	102/漢族社会における名前の「ルール」 102/名は体（と系譜と世代）を表す 103/名前を変えてはダメですか？ 105
5 祖先は恋のオジャマ虫——気軽に好きな人と交わっちゃダメですよ？	106
恋愛・性愛の多様化とインセスト・タブー	106/インセスト・タブーと人類学 106/祖先の目を気にしながらのアプローチ 107/いつでもどこでも不自由な恋愛 108
6 ふたつの絆——つながらないとダメですか？	110
「つながり」って何？	110/つながりの諸相 110/「くっついてはいけない」 111/キズナ中毒を考える 112

第6部

儀礼・宗教

Chapter

1 ウシに生きられなくなった人々——代わりにレモンじゃダメですか？	118
人生うまくいっていますか？	118/ウシの供儀 118/ウシを失ったとき 119/あなたにとっての「レモン」とは？ 121
2 「問いの精霊」に憑かれた女——主体性や自己がなくてはダメだと考えるのはダメかもしれない	122
自己が過剰な現代社会？	122/自己や人格をめぐる人類学 122/「かけがえのない自己」の怪しさ 123/自分ではないものとともにある自己 124
3 拾われなかった遺骨の行方——残骨灰を廃棄してもダメじゃない、だけど……	126
火葬場に残された父の骨	126/飛躍的な火葬の普及で生じた残骨灰 126/ご遺骨をぞんざいには扱えません 127/遺骨をどう扱いますか？ 129
4 宗教の定義をめぐる問題——信じてない神様を拝んじゃダメですか？	130
アナタハ神ヲ信ジマスカ？	130/「宗教は信仰の表現だ」という考えは意外に新しい 130/タイ国の山地から 131/無信仰は正しい？ 132

第7部

ジェンダー

Chapter

1 儀礼の変化——女性が儀礼を執り行っはダメですか？	136
ジェンダーによるタブー	136/宗教とジェンダー 136/ミエンの従来の儀礼と女性の参入 136/ジェンダーの壁の乗り越え方 139
2 保健活動と性——人前で話題にしてはダメなこと	140
性と医療の普遍性と個性	140/保健活動と性 140/テワードと村落保健 141/性の医療化 143
3 ニューギニア高地社会の「男らしさ」——モテなくてはダメですか	144
「モテ」と「男らしさ」	144/ニューギニアの「男らしさ」と身体観 144/ひとり身の男性たち 145/「儀礼的同性愛」の現在 147
4 移民女性とジェンダー——「女は外、男は内」じゃダメですか？	148
家事・育児は元々女性の仕事なのか	148/家庭内の性別分業をめぐる議論 148/妻の海外移動と家庭内性別役割分担の再編 149/「女は外、男は内」はやはりダメなのか 150

第8部

記憶と歴史

Chapter

1 雪かきをめぐり、知恵と工夫とやっつけ仕事

——雪国のダメな感じのブリコラージュ 154

国境の長いトンネルを抜けて、新幹線で1時間くらい走ると、そこはさほど雪国ではなかった
154／環境決定論と雪かき作業の近代史 154／除雪システムの体系化とブリコラージュの雪
かき 155／「文化人類学的雪かき」をめぐって 156

2 祖先の歴史——コピペではダメですか？ 158

「本当の事実」を探そうとする人々 158／記憶と歴史 158／現代中国における族譜の編纂
159／各社会における「写す」ことの意味 160

3 複数の歴史を生きてはダメですか？——祖先を選んで「未来」を創る 162

修学旅行はどこへ？ 162／複数の歴史を生きること 162／始祖を選んでアイデンティ
ティを決める 163／福建農村の歴史学習（親族ツーリズム） 164

4 「記憶」が「歴史」になるとき——活字で残さないとダメなんです 166

昔の暮らしを記録する活動・仕事 166／民俗学における「記憶」論 166／市民からの希
望で「歴史」を書き残す 167／「記憶」から「歴史」へ 168

第9部

メディア・表象

Chapter

1 民族とエスニシティ——漁業をしない漁民はダメですか？ 172

名は体を表す？ 172／固定的な「部族」から「エスニックグループ」へ 172／漁業をし
ない「漁民」 173／文脈・状況依存的な「自分たち」「あの人たち」 174

2 メディアが文化を創ってはダメですか？

——その話、誰から聞いた？ 何から聞いた？ 176

近所のオジサンとトランプ大統領 176／ウイックからサイバー空間まで 176／メディア
によって創られる民俗知識 177／メタレベルから文化や伝統を再考する 179

3 情報化社会を生き抜くヌエル人

——閲覧者数＝真実と考えるのはダメですか？ 180

インターネットの信じ方とは？ 180／真実を作り出すものは何／誰か 180／アフリカで
出会った真偽判定のロジック 181／強大な真実生成装置 183

4 高齢者とコミュニティ

——高齢者が神前でエアロビをしてはダメですか？ 184

「高齢者」は弱者？ 184／福祉の人類学、老年人類学そしてポピュラー文化研究からみた
「高齢者」 184／守護霊儀式での高齢者による「奉納エアロビ」：タイ北部のフィールドから
185／儀礼を見直す、そして高齢者の新たな役割・居場所を考える 186

第10部

国民国家とガバナンス

Chapter

1 “文化資源”とお国自慢

——大河ドラマと博物館は、タイアップしなきゃダメですか？ 190

“文化資源”の登場と地域の博物館 190／文化資源とは？ 190／文化資源としての地域
の歴史と「お国自慢」 191／文化資源の掘り方——露天掘りから採掘方法の模索へ 192

2 茅葺の家ではダメですか——地域社会を形成していた年齢階梯集団 194

災害と地域社会 194／日本の村落と年齢階梯集団 194／常識にとらわれない町おこし
195／変わりゆく社会集団 196

3 国家の指示通りではダメだから

——イデオロギー国家における国営農場の運営戦略 198

東西冷戦時代とわたし 198／社会主義国に関する研究動向 198／すべてはノルマ達成の
ため 199／微視的視点からみる社会主義社会 201

4 ダメなガソリンスタンド

——違法だが不正ではない？ 村社会のルール 202

傷んだバイクで走りだす 202／法を越境する村のモラル 202／ダメなガソリンスタンド
203／違法だが不正ではない 205

5 平和構築とノープロブレム

——自分が世界の中心じゃやっぱりダメですか？ 206

自分が中心ではないくない人類学者 206／人類学的平和研究のジレンマ 206／自文化中心
主義？ それともフィールドの世界観？ 207／悩ましい「自己中」の問題 208

引用・参考文献 211

おわりに 218

索引 221

著者紹介 225

凡 例

・キーワードリスト

各部の終わりに 50 音順でキーワードを挙げています(本文中ゴシック表記)。また、各キーワードを取り上げている事典等(以下①～⑦)の略称および掲載ページ数を示し、項目名が本書中と異なる場合は、〔 〕内に、掲載ページにおける見出し・項目名を記載しています。

参考文献(太字は略称)

- ① **(弘)** 石川栄吉・梅棹忠夫ほか編『文化人類学事典(縮刷版)』弘文堂、1994年
- ② **(最新)** 綾部恒雄編『文化人類学最新術語 100』弘文堂、2002年
- ③ **(民俗)** 福田アジオ・新谷尚紀ほか編『精選 日本民俗辞典』吉川弘文館、2006年
- ④ **(20)** 綾部恒雄編『文化人類学 20 の理論』弘文堂、2006年
- ⑤ **(キー)** 山下晋司・船曳建夫編『文化人類学キーワード(改訂版)』有斐閣、2008年
- ⑥ **(丸善)** 日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善、2009年
- ⑦ **(Lex)** 奥野克巳・石倉敏明編『Lexicon 現代人類学』以文社、2018年

・本文中の写真は、断りのない限り筆者撮影。

・本書には、法や慣習、ある社会における常識等を逸脱する事例についての記述があるが、それらは、各社会において犯罪とされる行為を推奨するものではないことに留意されたい。